

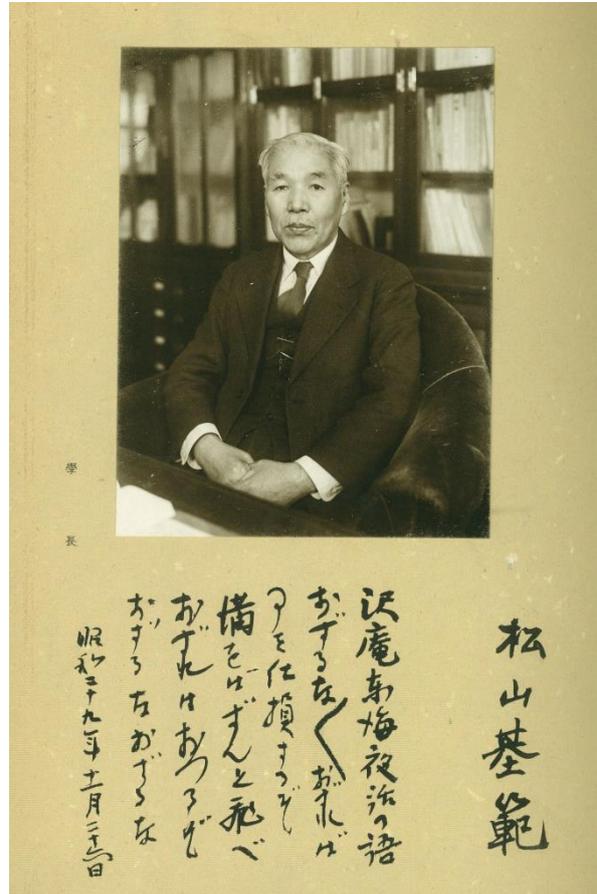
初代学長 松山基範

草創期の礎を築く

開学当時は、戦後の窮乏の中でインフレーションが進行し、庶民生活は苦境に喘ぎ、学生生活も著しい風波に曝された時代だった。学園では各母体の高専校から発足した各学部が、体裁を整えるために辛苦を重ねた時期である。

このような時期に着任した松山基範学長は、大分県出身で11歳～18歳までを山口県豊浦郡清末村高林寺（現下関市）で過ごした。京都帝国大学に入学し京都大学名誉教授となった後、65歳で本学学長に就任した。

昭和33（1958）年1月に現職で逝去するまでの8年8ヶ月の間、文理学部校舎の新築移転、教育学部分校の統合、工業短期大学部創設、経済学部専攻科及び商業教員養成課程設置などを整備するとともに、評議会や協議会を発足させ、学長選考規程、教授会規定など諸規則を制定し、草創期の本学の基礎を築いた。



松山基範学長

（昭和30年経済学部卒業アルバムより）

沢庵和尚の言葉を引いて、「おずるな（おそれるな）」と若者たちを鼓舞している。

世界的な地球物理学者

松山学長は著名な地球物理学者でもある。京都帝国大学教授在任中に、時代の変遷に伴い磁場が何度も逆転したという「地球の磁場逆転現象」の学説を昭和4年に世界で初めて提唱した。この論は当初、全く注目されなかったが、1960年代に入って世界的に認められるようになり、これにより、250万年から70万年前までの磁極逆転期は「松山逆磁極期」と名付けられている。

また、1930年代には測地学の分野でも、朝鮮・満洲・台湾・南洋諸島・日本近海の重力測定という業績を残し、特に日本海溝での負の重力異常発見は当時の国際学会で高く評価された。

山口への地域貢献

松山学長は、初代学長として学内の整備を行う一方、学者としての知識や趣味を活かして、精力的に地域社会へ貢献した。

学術調査団

「新設の国立大学は、学問の研究と学生の指導が使命であるが、地域社会の文化・学術・産業の振興にも寄与すべき責務があり、そうしてこそ大学への支援も得られる」との認識から、山口県と連携して長門日本海岸、佐波川、見島、島田川遺跡、秋吉台等で学術調査を行った。



秋吉台

特に秋吉台を米軍の空爆演習場に使用したいとの要請があった際(昭和31年)、学術調査団長として秋吉台の学術的価値を示すことで演習や計画を取り止めさせ、自然を保護したエピソードは有名である。

ユネスコ活動

社会的活動のうち、最も熱心だったのはユネスコ活動だった。学長就任直後の昭和24年に山口市ユネスコ協会初代会長、昭和26年には山口県ユネスコ協会連盟初代会長を務め、学長室で理事会などが開催された記録から、松山学長がユネスコ活動の中心的存在だったことが伺われる。

謡曲 (宝生流)

謡曲を生涯唯一の趣味とし、「いまおはじめ今尾始」の別名で能楽界でも有名だった松山学長は、山口宝生会会長として、大学や地域で謡曲を指導し、文化の発展にも貢献した。

顕彰碑

松山学長が少年期を過ごした下関市赤池町の高林寺境内に、松山基範先生を顕彰する会により顕彰碑が建立され、平成21(2009)年1月25日に除幕式が行われた。

碑は御影石で作られた地球をモチーフにした半円形で、表には本学卒業生で直木賞作家・古川薫氏による「地球を愛し、ふるさとを愛し、人間をこよなく愛したせきかく碩学」という一節が刻まれている。



松山基範先生顕彰碑